夢の形のあと

美丘ケイ

蝉の鳴き声を聞きながら、その日もいつもと同じ一日になるはずだった。

昨夜入ったお風呂の水を見ながら、朝起きてシャワーを浴びてから、コーヒー豆を挽きおもむろに、昨年亡くなった父の部屋を覗き見た。いまだに整理がつかづ、混乱したままだ。膨大な本類。それに加えて団地の初期の名簿が出てきた。サイズも紙質、紙の色も違うものが一冊に纏められ、さらにそれを3冊ほど繋がれたうえセロテープの剥がれた茶色が染み付いていて、ボロボロの状態だった。仁和寺の弘融僧都が見たらこれでよいのだと言いそうなくらいだった。

そこには各世帯主と家族構成に電話番号の一覧があり、後ろのページには近所にある商店街、電気屋、クリーニング、お米屋、本屋、診療所等が載っていた。つまり生活がこ

こで完結できるコミュニティーだった。

父たちは当時の憧れ的な公団住宅入居者で、小学校や公園などは子供で溢れ、社会は何の疑いも曇りもなく明るい活気を持った将来を見ていた時代だろう。この団地ができた1969年の入居者には今の姿は想定できなかったのではないか。

六畳間のダイニングキッチンと八畳間の居間それに四畳半の部屋と六畳間が二つとベランダ。テレビをみつつ、洗濯機を回し冷蔵庫の中から食材を取り出して調理する。そこには父たちの夢の一つの完結した形があった。ここは父あるいは母にとっても夢の完結形だったのではないだろうか。

しかしその完成した夢の形は、団地名簿に載っていた商店、診療所などが一つ、また一つと、気づかれないように閉店してその夢の形を失っていった。その廃れていくさまを気付かされないかのように。

それは母がいつも買いに行く、ストアーが

閉店しハンバーグを作る時に買う精肉店のお父さんが、もう店を畳みますと言って消え、そのようなおじさんおばさんのお店だけでなく、日本デニーズ1号店をもつイトーヨーカドーまでが閉店してしまった。近所付き合いのあるクリーニング店のおじさんが、もう店を閉めるという言葉を聞いた時初めて気づいた。

一つの夢の時代が終焉したということを。

「もう、団地の5階には住む人がいなくなってきています。」と言われベランダから向かいの棟をみると、本当に5階が空き家になっている。エレベーターの無いこの団地ではもう高齢者は低い階以外に選択肢がなくなっている。

年をとりそれとと共に足腰も弱くなり、血糖値があがり糖尿病になり感染症に弱くなる。高血圧がいつの間にか進行し心筋梗塞や脳卒中が襲い、自分の子供の名前を言えなくなり認知症を告げられる。夜中や早朝に救急

車の音がひっきりなしに聞こえてくるようになる。それと共に今まで見かけていた近隣の人の顔が見えなくなり、しばらくすると掲示板に訃報の張り紙にその人を発見する。

しかし、終焉の時が近づいて来ているのは、住人だけではなかったようだ。

その日の午前10時過ぎだったろうか、蛇口を捻っても水が出ないのだ。さっきまで出ていた、というかさっきシャワーを浴びていたのに今になって一滴も出てこない。思わず「あれ、断水の予定あったけ？」とぶつぶつ言いながら、念のために外に出て掲示板を見るが何にも無い。

「不思議だな～」と呟きながらも、一応お風呂桶には水もあるし、普段から飲み水もワインの瓶に詰めて飲む癖があるので飲んだり、調理は問題ないのだが。

しかし、本当に断水になったのを数時間後知ることになった。それは隣の街区の団地の芝生の下に埋設されていた水道管が破裂して

しまったため断水状態になったのだった。そう、この今住んでいる団地といういわば団地生命体の血管が破裂したようなもので、コンクリートの躯体を含めもろもろ綻びが出て来ているのを思い知った。

形あるものは必ず壊れるというのを、自分の住まいから学ぶとは思っていなかった。この憧れの夢の形が存在していたこの住まいが。

世は定めなきこそいみじけれ